

ロバートソンの署名 ——補説『会社という言葉』(2)——

馬 場 宏 二

「会社」という語の語義語源を我ながらしつこく探索し、著書『会社という言葉』¹⁾に纏めた。専門の歴史家でもないのに妙に拘わったものだが、それでも依然解らない問題が残り、後になって補填したくなかった論点が見えて来、埋めたつもりの副産物が何かの拍子に生き返ったりする。そこで間欠的に補説が必要になる。これはその二度目である²⁾。

1. 主題と結論—署名の判読

以下に掲げる文字は、横浜在のオリエンタル バンク コーポレーションから、1867年1月11日付けで、日本国政府勘定奉行小栗上野介宛に発せられた手紙の発信人の署名である。文書の性格や手紙の内容は後回しにするとして、まずこの署名を何と読むか。それが直接の問題である。



結論を急げば、この署名は J. Robertson と読む。そう読むと、幕末維新期のオリエンタルバンク横浜支店に該当人物が実在したことが判る。専門の歴史家がロバートソンとして知っている人物である。だが上記署名は、これまで正しく判読されたことがなかった。先学はトルヘトッド、あるいはトルトッドと読んでいた。これでは該当人物が出てこない。そのためこの手紙の信憑性が疑われ、ひいては文書全体の史料的価値が黙殺されることにもなる。それを正せば歴史の解釈に何らかの役割を果たすかも知れない。筆者は歴史家としての訓練がなく、自力ではこの署名を全く読めない。だが幸い、身近なところに優れた歴史家石井寛治氏がいた。石井氏に判読方をお願いしたところ、J. ロバートソンだと教えられた。この知識を私蔵するのは惜しい。そこで、ペティやヘンリー・マーチンら古典派経済学形成期の学説に関する探索³⁾が一段落したところで一筆書き記すことにしたのである。

2. 岸川家文書

現在、松本市教育委員会（松本城管理委員会）が、岸川家文書を所蔵している。小栗上野介の手許にあったとされる手紙計6点である。ひとまず、その一覧を掲げる（片仮名表記原文のまま）。

1. 邦訳文，1867年4月6日，横浜オリエンタル・バンク・コルポレーション発，日本政府御勘定奉行小栗上野介宛。杉田玄端訳 署名欄に「アクチング・エージェント 名字読兼申候」とある。
2. 邦文，1867年7月18日，御勘定奉行宛，末尾に，「エスワツソール，小栗上野介様」とある。訳者不明
3. 邦訳文，1866年9月28日，オリエンタル・バンク・コオペレーション発，御勘定奉行小栗上野介宛。この手紙は署名欄に「代人トル（？）トッド」とあり，末尾に塩田三郎訳とある。
4. 英文，1867年1月11日，横浜オリエンタル バンク コーポレーション 発，日本政府勘定奉行，小栗上野介閣下宛

この表現は筆者の邦訳だが，末尾の署名欄に，判読困難な，J. Robertson の文字があり，その下に，Actg. Agent とある。長文。

5. 邦文，冒頭に「別紙ノ翻訳」とあり，慶応二年九月二日発，末尾に小栗上野介，ヲリオンタンバンク頭取とある。その後ろにさらに小栗上野介様と書いて線で消してあるから，欧文の発信の邦訳の書き損じを控えにとっておいたものであろう。
6. 仏文，1868年2月6日，発信地が横浜で，宛名が江戸 日本勘定奉行小栗上野介閣下，発信人の署名が F. Piguet であることは判るが，発信組織名は書いてない。短文。

ひとまず形式的に分類整理する。手紙1の文中に「余が朋友ワッセウル君」とあるので手紙2と直接関わる。そしてこれを含め，手紙6をひとまず別とすれば，交信相手はことごとくオリエンタルバンクであり，発信日も1866～67年に限られる。純形式的には，手紙5が発信，他の5点は来信。手紙4が英文，手紙6が仏文，他の4点は邦文で，うち手紙1が杉田玄端訳，手紙2が訳者不明，手紙3が塩田三郎訳である。因に杉田玄端は杉田玄白の養孫に当たり，蕃書調所→開成所の教授になった蘭学者。塩田三郎は，金井円によればカシヨンの弟子でロッシュの通訳として信頼されていた人物。発信人の署名で括れば，手紙4を本稿結論の J. Robertson だとすると，手紙1も手紙3も同一人物と推定出来る。杉田玄端は Acting Agent を意識出来ずに音訳し，署名は読めなかったので正直に読めないと書いている。肩書きが同じオリエンタルバンクの支店長代行で発信日も近いから，手紙4のロバートソンと見てよかろう。手紙3で塩田三郎は肩書を「代人」とし，署名をトルトッドとしているから，金井円による判読と重ねればこちらもロバートソンになる。

本稿の目的からは，内容にさほど立ち入る必要はないが，勘定奉行小栗上野介忠順が幕府財政維持のために借款交渉をした過程の文書と推測出来る。手紙6だけが別件で，発信日も遅いから

例外と見てよかろう。研究史上これまで重視されてきたのは手紙3であり、先学4人は皆これに言及しているが、大意は、日本政府が6百万ドル借入れを望んでいる、うち1百万はオリエンタルバンクだけで調達出来る、担保としての銅の評価はなるだけ日本側に有利になるよう計らう、残る5百万はソシエテ・ジェネラル支店と協議のうえ双方の本店に申し送る、当行は最大限急速に送る、と言うものである。英文の手紙4は長文だが、5万ドルの請求だから、尾佐竹のように五百一千万ドル*などと誤読しなければ、内容的にはさほど重視しなくともよかろう。

*尾佐竹は『新旧時代』で文書を紹介した時には五萬一千百九十六ドルと正確に読んでいる。それを著書に転載する時、五百一千万九十六ドルと、とんでもない桁違いを犯したのである。

3. 文書との出会い

会社なる言葉の探索過程で小栗上野介に遭遇した。菅野和太郎『日本会社企業発生史の研究』⁴⁾に、日本で会社の概念を最初に持ったのが小栗上野介忠順であり、1860年に幕府の使者の一人として訪米してその概念を得たとする。典拠となった蜷川新『維新前後の政争と小栗上野介の死』⁵⁾には、パナマで山越えの鉄道に乗った時に得たかに書かれていた。実はこれはいささか考証不十分で、会社の概念を得る手掛かりがあったことは確かだが、この時即座に会社概念を捉えたと言えぬ証拠はない⁶⁾。小栗が営利企業としての会社を「商社」の名称で押し出すのは慶応年間1865~68年に入ってからだから、むしろフランス公使ロッシュの入れ智慧によると考えられるが、その点は当面は深入りせず、6. 補説に譲る。

関心を唆られたのはむしろ、小栗上野介忠順が極めて重要でかつ興味深い人物であるにも関わらず、彼については知り得ることが極めて少なく、まともな伝記もなければ一次資料もほとんどないことであった⁷⁾。そこで「会社」の語源探索と並行して小栗なる人物にも関心を抱き続けたが、その間にしばしば、東京大学史料編纂所図書室を利用した。そして、「会社」探索が一区切りつくころになってようやく、同所に金井円「小栗忠順の対英仏借款に関する岸川家伝来文書の再評価」なる論文⁸⁾の抜刷が所蔵されていたことに気付いた。これは「会社」に直接関わるころが少ないのでその後しばらくは放置し、『会社という言葉』を本に纏めるのに専念したが、その間に、「会社」に関わる日蘭関係について電話で懇切な教えを受けてくれた金井氏が亡くなってしまった。筆者が金井論文を改めて読んで、そこに小栗についての数少ない一次史料である岸川家文書が丹念に紹介されていることに注目し、直接口頭で詳しいご教示を得たいと考えた時には、それは叶わぬ望みになっていた。すこしだけ息継ぎをしたことが、取り返しのつかぬ逸機になった。

それでも金井論文は学術論文だったため、岸川家文書についての研究史初め基本的な事柄がきちんと書かれていた。それを手掛かりに、まず松本市教育委員会に文書を見たいと申し出た。当時の専門研究員中川治雄氏の御好意で、松本まで出かけなくとも済むようコピーが送られて来た。そこで、直接の問題である、手紙4の発信人の署名が、ほとんど読み様がないことを確認した。

読み難いらしいことは、最初の紹介者尾佐竹猛がトルヘトッドと読み、改めて本格的に考察した金井円がトルトッドと訂正していることから察知できたが、現物がこれほど読めないとは予想していなかった。冒頭がThと読めるので、トあるいはツで始まるらしいと考えたが、それ以上には読めない。だからトルトッドかトルヘトッドかの判定すら出来ない。しかし他方、文書は幕末の財政と外交に関わる、つまり明治維新史に関わる、重要で有力な史料らしい。そこで、さまざま考えた挙げ句、盲蛇におじずで石井寛治氏の指導を受けることにした。

まず、幕末の日本在留外国人名が『ジャパン・ディレクトリー』に掲げられていることを教わり、横浜の開港資料館まで見に行った。そこには、トルトッドだのトルヘトッドだのに当る名前はなかったが、逆に、オリエンタルバンクに関わる人名が数名分掲げられていた。そこで改めて、手紙4の署名の部分のコピーを石井氏に送り、見てもらうことにした。石井氏は多忙な調査旅行の合間だったが、日ならずして、これはJ. ロバートソンの署名だ、この形は他でも何回か見た記憶があるから間違いあるまい、と教えてくれた。2003年夏の初めの頃だったように覚えている。無論、この結論はさしあたり鵜呑みにするしかない。ロバートソンだと教わっても自分でそうは読めず、筆順を追うことも出来ないからである。

そこで、夏休み直後の教授会にコピーを持参し、19世紀英文学に詳しい佐藤史子氏に見てもらった。大東文化大学板橋校舎が改築中で、三号館が新設された直後だった。佐藤氏は、いきなり読めと言われてもすぐには読めないほど難しいが、ロバートソンと判っていれば文字は拾える、と筆順を教えてくれた。だが、筆者には記憶しきれず、今もってそれをなぞることが出来ない。

しかしJ. ロバートソンとの結論はこれで動かないと考えられる。そこでその旨を、群馬県在住の歴史家で小栗上野に詳しいお二人、経済史家中島明氏と倉淵村権田の東善寺住職村上泰賢氏に伝えた。村上氏は後に自ら文書のコピーを入手したとのことだった。中島氏からは、小栗上野の日記と文書の由来に関する伝承とが整合しない、伝承では小栗が官軍の追及を怖れて権田村から二カ月半も逃避していたことになるが、そうした行動は日記からは窺えない、との疑問を呈された。後に自分でも小栗日記を読んだが、この疑問は当然であった。

4. 判読の歴史

金井による研究史の整理を、多少補いながらなぞると、文書の存在は、尾佐竹猛が雑誌『新旧時代』第一年第五冊に手紙6の写真版とその邦訳を載せ、同第六冊の「余録」に書簡発見事情と由来に関する伝承の箇条書きとを記し、第十冊に「小栗上野介の遺物 幕末財政逸聞」として主要部分の内容を紹介したことによって公になった⁹⁾。尾佐竹は翌年これらを『国際法より見たる幕末外交物語』¹⁰⁾なる著書の「付録二」に収めた。雑誌に掲載した文章を殆どそのまま纏めて転載したものである。その後は、手紙の引用は『新旧時代』でなく尾佐竹の著書に依拠して行なわれるようになる。金井によると、神長倉真民『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』と石井孝『明治維新の国際的環境』が、文書中の「邦訳文書を他に得られない典拠として引用している」¹¹⁾。

尾佐竹猛は手紙6の仏文の自訳の他手紙4点を紹介していた。手紙3を塩田三郎の邦訳のまま、ただし発信人をトルヘ・トッドと読んで。手紙4の英文の自訳、ただし総額の転記を誤り、署名は無視して。手紙2。そして手紙1の末尾の玄端の文字を「アクチング・エージェント名字読難し」と読んで。後の金井はこれに手紙5を付け加えて全部を紹介し、さらに判読や解釈にも補正を加えた。

ところで尾佐竹はなお、『新旧時代』第五冊・第六冊に記した文書の由来についての伝承を、著書に転載していた。文書を彼に取次いだ、松本中学教諭栗田行孝からの報告だと言う。すなわち、小栗上野介が殺された時、親類のもの（岸川家のこと一筆者）が彼の遺物を携えて松本に逃れ、同市地蔵清水に住した。其の子孫岸川某（吉三郎の子の岸川隆または元一筆者）は松本中学の生徒であったが、右書類を発見して教諭栗田に披見を乞うた。以下箇条書きで、○文書は松本市地蔵清水町岸川吉三郎の所有、○同氏は群馬県碓氷郡坂本町坂本（現在松井田町）の出身、○同氏の母（権平妻一筆者）は群馬県吾妻郡妻孀（孀恋の誤植）村佐藤某氏の女にして小栗上野と親戚の関係を有する、○小栗上野介身辺の危険なるより親戚なる群馬県吾妻郡大戸村加部某方に難を避くること二ヶ月更に坂本町なる岸川氏方に来たり二週間程滞在し出立に際し岸川氏の父（権平一筆者）に一束の文書を託した。○明治十二年七月頃七八人の外人岸川家に来る、岸川氏の父欧文の文書を外人に見せしに外人は斯の如きものを所有するは危険なればとて金と交換して持ち去りし由（吉三郎氏幼少にて父の傍にて見て居りし由）。○その時取り残したるもの即ち比書簡及び他二三の英文の文書とす。岸川氏より仏文の訳を依頼せられ測らずも発見せるなり。

神長倉真民（かなくら・まさみ）は、『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』の中の、幕府の対仏借款交渉を論じた箇所¹²⁾で、手紙3を引いている。因に石井孝も『明治維新の国際的環境』の中で同じ手紙3を引用している¹³⁾。神長倉は岸川家文書全体の紹介を意図したわけではなく、おそらく手紙3も現物までは見ていないが、ジャーナリストらしい鋭い目で、塩田の訳文中五万ドルとあるのは五百万の間違いだらうとか、ソシエテ・ジェネラルの「参考」とあるのは「保証」の意味だらうとか、的確なコメントを加えており、別の箇所¹⁴⁾では問題の人物「ロバートソン」の名を挙げている。しかし、文書の由来については当然尾佐竹の記録のままである。石井孝は内容の解釈については意見を述べているが、もとは金井から引いたのだから、発信人はトルヘ・トッドと読んだままで、特別な考証は加えていない。

さて金井論文。紹介は全面的で詳細で正確を期した本格的なものである。事情以下の如し。「最近松本市教育長桐原義司氏より紹介があり、…岸川家の出で、松本市中区元町にあつて多年教育に尽力した岸川吉郎（一郎一筆者）氏が先年他界し、その未亡人ゆたか（豊一筆者）氏より…計六通の小栗上野介関係書類の調査を託せられたとのことで就いて確かめたところ、かつて尾佐竹博士の紹介したものと同一のもの及び未紹介のもの一点から成ること、紹介のフランス文書の邦訳は博士の手に成るものと思われ、正確を期してあるのに対し、イギリス文からの摘録にはかなり誤脱もあり、かつ邦文文書の翻刻にも厳密を欠くところのあるのを見出した¹⁵⁾。松本市教育委員会が、貴重な資料とおぼしい文書の精査を、松本生まれで旧制松本高等学校出身の歴史家¹⁶⁾

金井円に委嘱したのである。分析は本格的たらざるを得ない。ただそれでも完璧とならないところがこの種の作業の難しさなのであろう。『新旧時代』への登場ぶりの叙述がやや粗っぽいのが、それはまあ良い。文書の由来に関する伝承については、金井は事実上検証していない。また金井が桐原からの伝聞で「吉郎」とした人物は岸川一郎が正しい。同種の関係者人名の誤り・不完全は、尾佐竹の場合もっと多かった。(一筆者)と補筆したところは岸川家の当主岸川修氏から伺って、筆者馬場が記したものである。

そして、これは無理ないとも言えるが、金井はJ. ロバートソンの署名をついに読み取り得なかった。手紙4のサインを、金井はJ. THLUTURD [?]と判読するにとどまった。それも、手紙1の末尾を尾佐竹が「名字読難し」と読んだのを「読兼申候」と訂正し*、手紙3の場合は、署名を塩田がトルトッドと記し、書き損じ文字を塗り消して正しい部分を細線で繋いだもの(88ページに(?)と記した箇所)を、尾佐竹がトルヘトッドと誤読したのだと、かなり細かい考証をしているにも拘わらず、肝心の手紙4のサインの判読には失敗した。金井がもしこの判読に成功していれば、署名主は実在した横浜オリエンタルバンクの支店長で、幕末維新期の財政や金融制度創出に重要な役割を演じた人物だと即座に把握できたであろうから、岸川家文書は金井論文公表当時から遙に強い脚光を浴びたのかもしれない。

*この判定は自力では出来ない。同僚の日本史家兵頭徹氏の、原資料に即した御判断を仰いだ。

因に、文書の伝来について金井は、尾佐竹が栗田から受けた報告として記した事実を、やや簡略化している。大戸の加部方に二ヶ月逃避した件は全く落とした。大戸に加部安左衛門なる大商人がいた(吾妻町役場調べ)から、権田と近いことでもあり、ここと交流したことはあり得るが、金井は理由は付さずに削除した。また、「小栗が殺された時岸川家が彼の遺物を携えて松本に逃れた」との、尾佐竹のやや劇的な記述は、単に「岸川家が松本へ移住した際、残る文書を携行した」と淡泊化した。岸川家は火災に遭ったと伝えられているので、こちらはおそらく金井の淡泊な叙述の方が真実に近いであろう。なお岸川家には伝承についての記録がなく、尾佐竹や金井が文書化した筋書きを、補強したり訂正したりし得るほどの記憶は残されていないようである(当主岸川修氏による)。金井が変更しつつ残した伝承についても、中島氏の指摘する小栗日記¹⁷⁾との食い違い初め二三の疑問はあり得るが、金井はそこには立ち入らなかった。存命中に尋ねておくべき点の一つがこれであった。

5. ロバートソンなる人物

問題の手紙4の発信人、J. ロバートソンなる人物は、まず『ジャパン・ディレクトリー』の1868年分中の、オリエンタルバンク・コーポレーションの欄に、支配人代行(Acting manager) J. Robertsonとして出てきた。おそらくこの人が発信人だが、手紙の発信時が1867年初だから年次が合わない。同じ『ディレクトリー』によると、オリエンタルバンクの支配人は1866年にはG. リチャード、1867年にもリチャードで、この両年は他には会計係J. ラッセルしか挙がっておら

ず、ロバートソンの名前は出て来ない。1868年にいきなりロバートソンが支配人代行として登場し、その下にラッセルが会計・出納係と出、他に3人の名が挙げられている。ロバートソンの肩書きも、手紙は Acting Agent だから表記が食い違う。『ディレクター』の正確さには限界があるのかも知れない¹⁸⁾。

そう考えて辛うじて見出した文献が、立脇和夫『明治政府と英国東洋銀行』¹⁹⁾である。この本にはロバートソンの名は繰り返し出てくる。それを摘録するところなる。……オリエンタルバンクは1864年に横浜に支店を開設した。外国銀行としては四番目だが、当時東洋最強の植民地銀行だった。ジョン・ロバートソンは1866年来日し、リチャードを継いで第二支店長になり、在日十年余に及んだ。つまり彼は、最強の外国銀行の支配人として、ともに財政窮乏に苦しんだ末期幕府と初期明治政府に接した人物なのである。岸川家文書のあらかたが勘定奉行小栗上野介とオリエンタルバンクとの交信、半分がロバートソンの署名入りと推測出来る事情はこれで説明出来よう。おそらくロバートソンは、勘定奉行としての小栗にとっては最重要な交渉相手だったろう。因にフランス系の銀行コントワール・デスコントが横浜に進出したのは1867年だから、親仏派の小栗としても、資金繰り窓口としてはさしあたりオリエンタルバンクに依存する他はなかったに違いない。そしてロバートソンは彼なりに誠実に幕府に対応していたものと思われる。

明治になってからのロバートソンの動向は本稿の射程外だが、立脇氏の記述から気付いたことを二点、蛇足として加えておく。

第一に、明治政府とオリエンタルバンクとの接触は、大隈重信が英国公使パークスの紹介で1868年9月にロバートソンと会ったことに始まる。用件は横須賀製鉄所、小栗らがフランス公使ロッシュの紹介で招いた若き技師F. ヴェルニーの指揮下に作らせた日本最大の造船所だが、立脇氏によればこれがフランスのソシエテ・ジェネラルの抵当に入っており、明治政府が接收するには抵当解除のために50万ドルが必要だったのに財源がなかった。そこで「忍び難きを忍んでパークスに紹介を依頼したところ」パークスは「何時になき温言もて、いと快くその紹介を承諾し」高利ながら資金繰りがついた。^{ウツ}初心な明治政府は、パークスが思いがけず好意的な態度に出たのですっかり喜んでいるが、当時日本は英仏両国間の帝国主義的角逐の場になっており、小栗らの商社設立案にしても、もとはロッシュの生糸貿易独占構想に出、イギリス公使がオールコック以来執拗にそれを妨害し続けたことを考えれば、フランスの権益を日本から駆逐し、傍ら自国の銀行に利得機会を与える一挙両得にパークスが喜んで手を貸したことなど当然であろう。

第二に、1874・5年、三井組は危機に陥り、オリエンタルバンクから100万ドルを借入してそれを凌いだ²⁰⁾。同じ頃小野組、島田組は倒産している。さて三井に対してオリエンタルバンクは極めて寛大だったとされるが、三井側には大番頭三野村利左衛門がいた。ここは物証なしに状況証拠だけで言うのだが、三野村は浪人の子で、忠順の父忠高のころ駿河台の小栗家へ中間奉公して忠順とは既知であり、商人として大をなしてからも訪問し、小栗が追われる身になった時アメリカへの亡命資金の提供を申し出たとされる。つまり小栗が勘定奉行としてロバートソンに接していた頃、小栗を介して三野村とロバートソンが知りあっていた可能性がある。小栗は折衝過

程で金銭知識が豊かで気心の知れた三野村を相談相手にしていたのかも知れず、ロバートソン側も三野村を評価していたかも知れない。ひょっとするとそうした接触が一助となって三井は助かったのかも知れないのである。

6. 補説：「会社」という言葉

今回の探索で、「会社」用語史として補うべき論点が三つ現れた。

一つは主役であるオリエンタル・バンク・コーポレーションの名称である。幕末以降の日本では、「会社」が英語の Company の同義語のつもりで定着して行くのだが、英語の Corporation になる道も僅かにあった。福地源一郎訳『会社弁』は会社語源論として有名な文章で、その「小引」に、「会社トハ全て百般の商工会同結社セシモノノ通称ニテ、通常英語<コンペニー><コルポレーション>ノ適訳ニ用ヒ来リ特ニ銀行ニ限ルノ義ニ非ストイヘドモ云々」とあった。この「コルポレーション」の由来が不明だったので、会社を一般名詞で言う時、イギリスでカンパニーが普通だが、アメリカではビジネス・コーポーションの意味で単にコーポレーションと呼ぶからアメリカの筋からだろうと想像し、福地が名を挙げたウェイランドなどを探してみたが、納得の行く手掛かりは得られなかった²¹⁾。それも当然で、実はもっと実質的な契機があった。それがオリエンタルバンク・コーポレーションだった。幕末早目に来日し、幕府最大の取引相手となっていた。洋学派の幕臣福地源一郎がこれを知らないはずはない。文脈が銀行と絡むことでもあり、福地の頭には当然オリエンタルバンクが浮かんでいたであろう。そこから「コルポレーション」が出てくる。因に同行は特許状を得ていたから、格式上当然に Corporation と名乗ったものと思われる。当然だがこの語は岸川家文書には毎回出て来た。但し仮名書きが毎回異なっていた。同行の他にも、コマーシャル・バンクと香港上海銀行が名称にコーポレーションを付けていた²²⁾。「コーポレーション」は満更無視して良い状況ではなかった。この語の使用頻度が低く、「会社」の原語と意識されるに至らなかったのは、語義もさることながら、長くて発音し難く覚え難いせいだったのかも知れない。

第二に、岸川家文書中の手紙2の訳文に「ゼネラル会社」とあった。société generale の訳語である。因に同じ企業を手紙3では「ソシエテゼネラル」と仮名書きしていた。「会社」はもともと蘭学者の創案語で、学芸の専門家同志集団の意味を主とし、営利の意味を含まなかった。幕末開港後に開明的実務派幕僚が共同出資営利企業を「商社」と呼び始めた。これには、VOCの後継者として来日していたNederlandsche Handelmaatschappijの影響が強かったであろう。「商社」は一般名詞化し、慶応・明治初年には蘭学者の「会社」とは別に、営利企業一般の意味に使われていたが、固有名詞「和蘭商社」として使われた場合もあった。そしてそれと対比的に、フランス関係の企業を「会社」と呼んだ例がいくつか出てくる。この手紙2はその一例である。明治政府の強制で共同出資営利企業は結局「会社」に収斂して行くのだが、この手紙2の用例はこの語義での初期のものと言えよう。

第三に、神長倉真民の登場がある。金井論文が、『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』が岸川家文書を利用していることを述べていた。そこで参照して見ると、まことに鋭い指摘を含む。のみならず、この書は、日本における共同出資の営利企業としての「商社」あるいは「会社」が、ロッシュの生糸独占構想に由来する可能性が高いことを明快に指摘した最初の書ではないかと思われる²³⁾。私自身も同じ結論にほぼ達していたがまだ不十分だったし²⁴⁾、その説の提唱者が神長倉だったことには全く気付かずにおり、今回の検討で初めて明確になった。この点について神長倉は、『明治産業発生史』²⁵⁾の中でさらに掘り下げて詳論している。初めからこの知識があれば、『会社という言葉』はもう少し早目に仕上げられたかも知れない。

7. 問題の拡がり

管見寡聞の範囲で、小栗上野介の一次資料は、群馬県渋川市後藤家所蔵の自筆文書、慶応三年元旦から慶応四年閏四月二日までの日記および嘉永三年から慶応四年に互る家計簿²⁶⁾の他には、この岸川家文書しかない。全く不思議なことである。日米修好通商条約締結記念のために幕府が派遣した遣米使節団に、正使新見豊前守、副使村垣淡路守につぐ三番手の監察として加わり、結構タフな対米交渉をしたあげく、一行で日本最初の世界一周（有名な、咸臨丸の太平洋横断は、企画としてはこの使節派遣のオマケに過ぎない）を成し遂げ、帰国後外国奉行や海軍奉行などの要職を経た後、慶応年間のほとんどを勘定奉行として幕府財政の維持に努めた、いわば幕末最後の重要人物である。ところがこの人物の資料が殆どない。派米に際して幕閣から小栗に与えられた指示書²⁷⁾も、また、「商社」の用例として有名な、小栗ら勘定奉行連名の「兵庫開港に付商社取建方並御用途金見込の議申上候書付」も、いずれも小栗の所蔵としてでなく、対抗馬勝海舟の所蔵²⁸⁾として世に伝えられている。不思議以上に、意図的な資料抹殺があったのではないかと想像したくなる徹底的な消滅ぶりである。その抹殺は小栗斬首時に倉淵村権田で官軍の命令下に行なわれたと考える他はない²⁹⁾。

小栗の伝記は、阿部道山や蜷川新以降、繰り返して試みられて来た。今なお資料発掘が進められ、新しい人物像を描く試みは続いている³⁰⁾。それでもそれらが、「小説」と銘打つ他はなく、正面切って「伝記」と名乗れないのは、この一次資料の不足や朝敵扱いに由来する事実の隠蔽歪曲のために、基本的事実さえしばしば推測による他はないからである。しかも小説となれば時代好みの美化や作者流の虚構が加わる。しかし、せっかくあった一次資料が使われずに来たという事情もある。早い話、ロバートソンが登場する伝記小説を読んだ記憶がない³¹⁾が、岸川家文書を使えばどこかには入れざるを得なくなるだろう。これを使ったからと言って全く新しい小栗像が出現するわけではないが、苦境に立つ財政担当者として力量を示した側面³²⁾や、小栗の国際性の側面を改めて強調するきっかけにはなる。それをもう二回りほど飛躍させると、明治維新による和魂洋才型「近代化」は、すでに幕府内開明派が構想していたものであり、尊皇攘夷は無論のこと、倒幕さえ、気楽な位置にいた後追い勢力が引き起こした、なくもがなの、むしろ国益を損ね

た騒擾だったことになりはすまいかと言うのが、筆者の野次馬的維新史観である。

註

- 1) 馬場宏二『会社という言葉』2001年 大東文化大学経営研究所
- 2) 第一回目が、馬場宏二「補説『会社という言葉』」大東文化大学『経営論集』第5号、2003年2月である。
- 3) 馬場宏二「ペティ経済学の継承」大東文化大学経済研究所『経済研究』第18号、2005年3月、および「マーチン“変説”の探究」大東文化大学『経済論集』2005年7月
- 4) 菅野和太郎『日本会社企業発生史の研究』1931年 岩波書店
- 5) 蜷川新『維新前後の政争と小栗上野介の死』1928年 日本書院、同『開国の先駆者小栗上野介』1953年千代田書院 も同趣旨。
- 6) 小栗自身の訪米記は何一つ残っていない。同行の勘定組頭森田清行の文に、鉄道建設資金は発起人が呼びかけて資金を持つものが出資し年々借高割戻を受ける、という記述があり、それだけである。企業組織が拮据しているか否か疑わしい。参照、『萬延元年遣米使節史料集成』1961年 風間書房 第一巻77ページ
- 7) 筆者が小栗の人物像を得た最初は、阿部道山『海軍の先駆者小栗上野介正伝』1941年、海軍有終会を、東京大学経済学部図書館で偶然見つけた時であった。
- 8) 金井円「小栗忠順の対英仏借款に関する岸川家伝来文書の再評価」、徳川林政史研究所『研究紀要』、昭和45年度
- 9) 『新旧時代』第一年、大正14年、第五冊6月、第六冊8月、第十冊12月
- 10) 尾佐竹猛『国際法より見たる幕末外交物語』1926年12月
- 11) 金井前掲論文、390ページ
- 12) 神長倉真民『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』（幕末経済秘史第一巻）1935年 ダイアモンド出版、240～241ページ
- 13) 石井孝『明治維新の国際的環境』1957年 吉川弘文館、547～8ページ、同増補改定版1966年、674ページ。なお手紙3の引用に関して、石井の初版は尾佐竹に依拠し神長倉にも言及、金井論文が石井の初版引用、石井は増補版では金井論文に依拠している。
- 14) 神長倉前掲『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』254ページ
- 15) 金井前掲論文、390ページ
- 16) 金井は東京大学史料編纂所教授、日蘭学会会長を歴任。生地は松本郊外山辺の由。
- 17) 小栗日記によれば、小栗が慶応4（1868）年1月15日（以下旧暦のまま）将軍徳川慶喜に罷免されて権田村（現群馬県倉淵村権田）東善寺に隠棲したのが3月1日、官軍の圧迫が日記に現れるのが4月末だが、この間の日記は、到着直後数日の暴徒襲来騒ぎの他は、殆どが観音山の新居建築のために見回りに行っている記事だけで、閏4月には捕えられて6日に斬首されているから、大戸や坂本に避難している時間はなかったことになる。暴徒騒ぎが収まったのち、大戸村から村役人が挨拶に来た旨の記述はある。
- 18) 『ディレクトリー』自体の考察として、立脇和夫「戦前期の“ジャパン・ディレクトリー”」長崎大学『東南アジア研究年報』第27集、1985年を見よ。「必ずしも正確ではないが、在日外国人の人名・職業・住所を知り得る資料として基礎的」と言われているとのことである。
- 19) 立脇和夫『明治政府と英国東洋銀行』1992年 中公新書。ロバートソンは『来日西洋人名事典』に出て来ない。立脇和夫『在日外国銀行史』1987年 日本評論社には纏めて書かれているが、記述

の内容は『明治政府と英国東洋銀行』の方が改善されている。なお、小栗とオリエンタルバンクの間で交渉があったことは栗本鋤雲の文章から解かる。後出、註(32)参照。

- 20) 三井危機の本格的な分析としては、石井寛治『近代日本金融史序説』1999年 東京大学出版会、第2章第3・4節、148ページ以下。石井氏は、危機克服の原因として、旧来の政府保護説や自力説に対して外資説を唱えている。
- 21) 馬場前掲「補説『会社』という言葉」、2. company と corporation
- 22) 参照、立脇和夫、前掲『在日外国銀行史』
- 23) 神長倉前掲書、235～6ページ
- 24) 馬場前掲『会社という言葉』77～80ページ
- 25) 神長倉真民『明治産業発生史』1936年、ダイヤモンド社。この点の詳論は後日を期す。
- 26) これは印刷物として、群馬県文化事業振興会『群馬県史料集第七巻』に収められている。小栗の直筆は渋川市の後藤家に所蔵されている。冊子で、日記2冊、家計簿4冊
- 27) (立合目付宛老中連判状)「御目付へ 下知状案」『勝海舟全集19 開国起源V』、1975年 講談社
- 28) 「兵庫開港に付商社取建方並御用金見込の議申上候書付」上掲『勝海舟全集19 開国起源V』所収
- 29) 小栗日記を発掘した本田夏彦は、この文書を後藤八郎右衛門(後藤家当主惇氏の高祖父)が、初代岩鼻県知事となった大音龍太郎に起用されて会計事務を主掌し、小栗上野介刑死後、その後始末に行き、「其際小栗遺品中より、当時何人の注目をも引かざりし個人の日記、家計簿が塵芥とともに焼棄せらるるを惜んで、私かにこれを持ち帰った」と「想定」している。前掲『群馬県史料集第七巻』8ページ。大音がさらに上の意向を体して後藤に史料の徹底焼却を命じ、後藤がその中から、冊子になったもので明らかに官軍に無害と見える二点だけ持ち帰ったと考えられなくもない。
- 30) 例えば最近年の作である、童門冬二『小説 小栗上野介』2002年でも、勘定奉行としての側面はさほど書き込んでいない。資料不足もあり、通常の作家にはコナせない領域でもあり、小説になり難い側面でもあるが、これでは本人が最も苦勞した仕事が現れないことになる。
- 31) 小栗の財政担当者としての側面を割りに詳しく描いたのが大島昌宏『罪なくして斬らる』1992年であるが、これにもロバートソンは登場しない。経営学者坂本藤良の『小栗上野介の生涯』1988年講談社は「商社」の創設を中心に、経済面の記述が多いが、これにもロバートソンまでは出てこない。
- 32) 小栗との交流を軸に三野村利左衛門を描いた、高橋義夫『日本大変』1997年 ダイヤモンド社は、小栗の勘定奉行としての側面をある程度まで書き込んだ珍しい例であるが、それでも「忠順はたまたま横浜のオリエンタル銀行に交渉ごとがあつて出張し」との一行と、小栗死後の明治政府の貨幣改鑄に関して「東洋銀行支配人、ロバートソン」の建白があつたことが書かれているだけである。因にオリエンタル銀行との交渉の件は、栗本鋤雲が「上野云ふ、今日英国「バンクヲリヤタル」に掛合ひ事あり、固より支配向きの者にて済む事ながら、埒の明かざるを恐れ、午後より出港したるが、用事忽ち済みたれば、兄に面し度事もあり云々」と書き残した、軍艦修理の手続きに関して、路上で会った小栗が栗本の採った方法を大声でホメたという回想(『匏菴遺稿』中「横須賀造船所経営の事」)に依拠しているであろう。親友栗本鋤雲はこんなところでも小栗忠順伝に貢献しているのである。